

# 8-12 抗議集会詳細

## オウム対策住民協議会ニュース

### センター広場に500人

オウム真理教反対デモ集会・学習会が八月十二日、烏山区民センター広場に約500人が集まり行われた。

オウム真理教は例年この時期にセミナーを開催。当日もオウム信者一四三名が参加しており、この時期に合わせて抗議集会を開催した。

夕方五時、曇り空の中、各町会の旗やオウム信者居住反対の横断幕と幟を先頭に、オウム居住マンション「GSハイム」前までデモ行進を行い、シュプレヒコールの後、抗議文をオウム信者側に手渡した。

その後、六時十五分から区民センターホールにおいて、オウム真理教家族の代表・永岡弘行氏による講演が行われた。集団と脅威、それとご自分の息子を脱会させるまでの経験などを話された。



### 永岡弘行氏の講演を聞いて (寄稿)

オウム対策住民協議会 実行委員 小田 道雄

やはりそうなのかと思つた。

オウム問題には必ずと言つていいほど家族問題が横たわっている。永岡氏の息子さんが脱会を決意したのは、VXガスを浴びて病院のベッドに横たわっている父永岡氏の姿を見たときだった。氏は会社も辞め息子を奪回するため「オウム真理教被害者の会」を結成し、教団と交渉を開始する。入信から脱会まで、七年間の救出活動だった。考えてみれば、自分は息子とあまり遊んだこともないモーレッツサラリーマンだった。子供は親の姿を見て自然に成長するものと思つていた。それが間違っていた。オウムの洗脳によって別人となつてしまった息子にどんな問いかけも空しく通り過ぎてゆく。ある時、息子と一緒にオウムの説法会に行き麻原に直接質問をぶつけてみた。「あなたがヒマラヤで修行をしたと言われている時期と薬事法で捕まっていた時期が一致しているがどうしてか」。すると答えは「それがどうした」だった。また、ダライ・ラマにも直接会い、オウムと関係ないことを確認する。永岡氏は坂本弁護士一家の救出活動に加わるなか、魔の手によって倒されてしまう。目が覚めたとき、目の前の息子に言った。「おまえがやったのか」と。息子は無実を証明するため脱会を決意した。まさに命がけの戦いだった。

### 『オウムの教義』

オウムを宗教としてとらえるときに、大乘、小乗、ヨーガ、ヒンズー、果てはキリスト教まで、ありとあらゆる宗教を取り入れたパッチワーク宗教だとよく言われる。しかも張りぼてだから中身がからっぽという訳である。しかし、それはオウムに限った事ではない。あらゆる新興宗教、新宗教に共通している。教祖は数千年前の賢者の言葉をも自分の言葉のように語り、信者を煙にまく。彼らは片手で「死」という楯を持ち、もう一方の手で欲望を貪る。しかし彼らが存続しているのには訳がある。それは死の恐怖から少しでも逃れ「共同幻想をいだける共同体」に身を置くことで安心する人たちの欲求、つまりニーズがあるということだ。まるで悪魔と取引をしているように、私ならごめんこうむるが、世の中には騙されることとほつとする人もいるということなのか。

理系のボンボンには世間知らずだから騙されやすいのだ」という言い方をする人がいるが、彼らはそんなにバカではない。出家までしてオウムに飛び込んでいくには強く惹きつけられる「何か」があったはずだ。じつのところ麻原は日本の仏教界がタブーとしていたこと、いわばパンドラの箱を開けてしまったのだ。



「シヴァ」である(現アレフも同じ)。そして教義の中心に「タントラ、バジラヤーナ(金剛乗)」をおいている。タントラとはエロス、生命。バジラヤーナとは争い、破壊という意味である。つまりタントラ、バジラヤーナとはセックスと暴力の思想のことである。なぜインドでこのような思想が生まれたのか。日本人には想像もできないが、人間以下、いや動物以下とみなされているアウトカースト(最下層)の人たちがいる。理不尽なカースト制に対し「全てを破壊してしまえ」という狂気の宗教は憎悪と怒りに満ちて誕生した。麻原はここに目をつけた。

### 『オウム信者たちへ』

烏山のオウム道場は、まるで都会の洞窟だ。窓は鉄板で覆われ、入口は鉄の扉でかたく閉ざされている。その暗闇の中で、あなた方はいまだに麻原を尊師として仰ぎ、シヴァ神を主神としている。それはオウムが犯した大罪を肯定していることに等しい。私はオウム信者の人たちに是非試してもらいたい事がある。それは本物の「宗教芸術」に触れることだ。八部衆立像はちぶしゅうりゅうぞうや十大弟子立像じゅうだいしでしりゅうぞう(奈良・興福寺)を実際に目にしてほしいと思う。その表情は単なる慈悲ではない。勇気や優しさなど、二つ以上の複雑な感情が表されていることが読み取れる。千数百年前、すでに日本の仏教はある到達点に達していたことを知るはずだ。真理の地平線は遙か彼方にある。追つても追つても、また新たな地平線が浮かび上がってくる。だが、ふと気がつくとき自分の足元も地平線なのだ。人は問う「死とは何か」「生とは何か」。その答えは簡単には見つからない。半年や一年で得られた真理などニセモノだ。何故なら宗教の真髄はお手軽な答えなどではなく、その問いそのものだからである、と私は思う。



## 第3回オウム真理教（現アレフ）反対デモ集会・学習会アンケート集計報告

8月12日のデモ集会・学習会に参加して下さった方々のアンケートの集計結果です。ご協力ありがとうございました。

### 1. 抗議集会・学習会に参加したことがありますか？

(1) 初めて	(2) 2回目	(3) 3回目
37	40	57

### 2. あなたのお住まいは？

(1) 北烏山	(2) 南烏山	(3) 給田	(4) 粕谷	(5) 上祖師谷
24	55	5	19	1
(6) 上北沢	(7) 八幡山	(8) その他	大田区：1 杉並区：1 文京区：1 その他：2	上馬：1 喜多見：1 新宿区：1
4	18	8		

[アンケート回収枚数：134枚]

### 3. 抗議集会・学習会・オウム対策住民協議会に対する主なご意見

- ・現在のオウムの活動状態を知りたい。
- ・オウムに負けないように、定期的に抗議集会・学習会を開催してください。
- ・オウムの集団的居住を法的にやめさせる方法はないものか、法律の専門家からの意見や提言などを広報資料の中で紹介していただければと思います。
- ・だんだん盛り上がってきた感じがします。地道に、長期に活動を継続することが力になると思います。頑張りましょう！
- ・地元の私達も参加できるよう呼びかけて欲しい。
- ・地区の抗議活動には限界がある。国レベルで基本的な解決を望む。麻原を早く死刑にせよ。
- ・施設周辺、商店街の人々の積極的参加活動が必要。
- ・住民の方々はオウムに対して認識がない。自分に関係ないと協力しない。
- ・若い人たちがもっと協力して下さる様望みます。
- ・今度は大家を呼び出せ！

## 住民協議会活動報告

8月5日（日）

- 8月12日反対デモ集会広報チラシの街頭配布

8月6日（月）

- 「オウム対策住民協議会ニュース（第7号）」発行

8月11日（土）

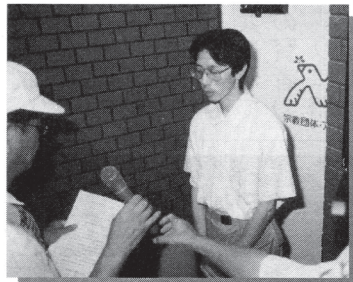
- 企画部会詳細打ち合わせ
- デモ集会広報チラシの街頭配布および広報車でのデモ集会告知

8月12日（日）

- デモ集会広報チラシの街頭配布
- オウム真理教（現アレフ）反対デモ集会・学習会

8月25日（土）

- オウム対策住民協議会会議（第3回）  
今までの活動報告と今後の方針について
- 広報部会  
「オウム対策住民協議会ニュース」第8号の内容確認とレイアウトについて



教団に抗議書を手渡す。  
8月12日

- 8月12日のオウム真理教（現アレフ）反対デモ集会で、以下の抗議書を教団に対し手渡しました。

### オウム真理教（現アレフ）に対する抗議書

今、ここ烏山の地はかつての上九一色村のサティアンと同じようになっている。

この間、あなた方オウム真理教（現アレフ）教団は、施設公開を何度も行って来た。しかし、我々の仲間があなた方の施設を見たときにはないのに、警察当局の捜査の際には麻原彰晃の写真が発見されているではないか。

名をアレフと変えても、麻原彰晃を仰いでいる事実を、あなた方はごまかしている。ごまかす者には真実はない。

我々は、個々の信者の思考を奪い去るあなた方のやり方に強い不安を抱き、断じて許すことはできない。また、親としてここ烏山の若者たちをあなた方の危険な教義から守らなければならない。

我々は、教団が、数々の凶悪事件の被害者の立場に立ち、真に反省し、即刻解散することを強く求める。

また、1月9日の抗議書に示したように、我々は教団を脱会するものには地域住民としてでき得る限りの支援をすることを改めて約束する。一般信者たちよ、私達の懐に飛び込んできなさい。

平成13年8月12日

烏山地域オウム真理教（現アレフ）対策住民協議会

## 協議会での議論から

★協議会の場では、いろいろな意見が飛び交います。8月25日の第3回会議では、参加者同士で、次のようなやり取りがありましたのでご紹介します。

- オウムはあの大家が5年契約を結んだ事で5年間は出て行かない。出て行かないのになぜ反対運動を続けるのか？
- オウムとの戦いはこちら側にプラスになることは一つもありません。反対運動を続けることでやっとオウムとの均衡が保たれる位だと思います。もし反対運動も何もしなかったら、オウムは「住民の皆さんとは十分に理解を得られて、良好な関係を築いています。」と、裁判でもあらゆる場面で利用するでしょう。ここは本部になっている訳ですから、その責任も大きいものと思われまます。
- 今いる信者に対し何の反対運動もしないと言うことは、お互いの存在を干渉しない事で、得をするのはオウムでしょう。反対運動は「住民がオウムに反対をしているのだ」というオウムに対する住民の意思表示です。反対運動を盛上げることでオウムが自由に動けないようにしているのです。共生と言う言葉がありますが、もし共生を言ってオウム信者が烏山中を自由に動いたら烏山で布教活動を活発化するでしょう。公園や駅前でサリン事件など知らない若者をオウムに入れてゆくでしょう。子供をオウムに取られた家族がどうやって子供を取り返すのか。お布施と言って自分の預貯金や遺産相続分をオウムに差し出すと言う騒ぎが自分の家族から出ないと言えるでしょうか。結して他人事ではないのです。

★いろいろな意見を出し合って共通理解を重ねながら解決方法を考え、反対運動を続けて行かなければならないと思います。住民の皆さんのご意見もぜひお寄せ下さい。